



ライオンの肉を食べる

池谷 和信 (いけや かずのぶ)

本館民族社会研究部

人間にもあわてず

アフリカのカラハリ砂漠で現地の人と一緒に狩猟に出かけていると、多数のハゲタカが群がって飛びまわっている光景に出あうときがある。そこは三六〇度に向わり地平線の見える見晴らしのよい大地で、そういうときには死んだばかりの獲物があるにちがいないという。あんのじよう、あるときには何者かによって殺されたキリンが横倒しになつていた。長



天日で乾燥
させている
ライオンの生肉

い首筋には、齒のあとが残っている。

その犯人は、ライオンである。現地に住んでいるカラハリ先住民は、狩猟や採集を通して世界でもっとも自然を熟知しているといわれてきた。その彼らもとても恐れている動物がライオンなのだ。そもそも出あつた際のライオンの動きは奇妙である。カラハリ砂漠で四輪駆動の車を使って移動する際に動物に出あうことはたびたびある。ほとんどの動物はすばやく走つて逃げてしまふが、ライオンだけは、人間の存在に気がついてもあわてるようすはない。夜になつてキャンプする場合にも、現地の人は焚き火のまわりではなく、車の荷台や屋根の上で寝ることを望む。夜中にライオンがやってくることを恐れているからだ。

タブーのはずが

わたしは、これまでおよそ二〇年、カラハリ砂漠の先住民の人びとから、狩猟を通して彼らの動物に対する見方や動物とのかかわり方を学んできたが、二〇〇八年六月六日だけは忘れられない日になった。これまで、彼らが絶対に食べるのではないと思つていたライオンの肉を口にしてるところを見たからだ。

カラハリ砂漠には動物保護区があり、自由に狩猟をおこなつたりはできないのだが、わたしは畏で捕獲されたライオン

を解体するところに偶然にも居合わせたことが以前にもあつた。だがそのときには、彼らは皮をもち帰つて肉を捨てていた。多くの村人からも、ライオンは食べてはいけないものだといっていた。

しかし、今回は、村のある家を訪問した際に、三メートル近い紐が張り渡され、細長く切られた生肉が干されているのを見た。これは、何の肉かと聞くと、ライオンと答えが返つてきた。このライオンは村のウシを頻繁に襲うということで、有害駆除のようなかたちで特別に捕獲されたものだといふ。小屋のなかでは、鉄鍋のなかでライオンの肝臓を煮込んでいた。ライオンの肉はかたくて、調理には数時間かかるという。

わたしの知り合いが、鍋のなかの肉をもらい、これをうまそうに食べているのを見てわたしは驚いた。今までライオンを食べなかつた人たちがなぜ食べるようになったのか。それともわたしがタブーと信じ込んでいて個人による好みの差を見落としていただけなのか。わたしも、同様に肉片をもらい、これは肝臓といきかせながらそれを口に入れ軽くかみ砕いてみた。しかし、ライオンを食べるのは変だという考えがよぎり、いたたまれなくなつてはきだしてしまつたのである。あらたなものを食べる際には、食べ物の実味の味よりも、文化的な先入観に左右されることを思い知らされた一日であつた。